



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年12月27日 聖家族B年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 15章 1-6、21章 1-3 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 11章 8、11-12、17-19 節

福音朗読：ルカによる福音書 2章 22-40 節

今日のテーマ：聖なる家族とは

三つの朗読から

第一朗読の『創世記』14章と15章には様々な契約(約束)が描かれています。第一番目は王と王(国と国)の契約(約束)。第二番目は人と人(アブラムと神を通じたソドムの王)の契約(約束)。第三番目は神と人との契約。それが今日の朗読箇所の前半の部分です(15章 1-6 節)。

第二朗読の『ヘブライ人への手紙』11章には、「先祖たちの信仰」と題して、イスラエルの歴史の歩みの中で信仰を生きた人々の姿が描かれています。「信仰」という単語が24回登場します。この章の冒頭の言葉が信仰の本質を説いています(1-2 節)。信仰とは、希望していることを保証し、見えないものを確信させるものです。

福音朗読の『ルカによる福音書』2章では、イエスの誕生物語と成長の物語とが綴られます。1-20 節はイエスの誕生、22-39 節はエルサレムの神殿での奉獻、41-51 節は12歳の時の神殿での出来事です。今日の朗読箇所は、幼子イエスの神殿での奉獻の出来事です。『ルカによる福音書』の作者は、「彼らの清め」という言い方を使って、①マリアの母親としての産後の清めと、②幼子イエスをナジル人と重ね合わせて、ナジル人としてのイエスの聖別を考えているのではないのでしょうか。そうしますと今日の朗読箇所は、単に律法の規定に従う幼子の神殿奉獻を伝えるだけではなく、イエスがナジル人のように「主に献げられた聖なる者」であることを示そうとしているのだと考えられます。

説教

聖家族……。

ふと、祈りの最中に思い出しました。新入学の時、ランドセルは誰が買ってくれたのだろう？ 電話で母に聞いたら、覚えていないという。今も昔もランドセルは決して安いものではありません。小さな子どもを抱えた家庭にとっては、大きな出費なはず。おそらく我が家も同様だったでしょう。きっと誰かが買ってくれたのだと思います。父方の祖父母か？ 母方の祖父母か？ それとも親戚の誰かか？ も

う半世紀以上も前のことで、誰も覚えていません。しかし今のわたしには、ランドセルはちょっと苦しい思い出です。というのも、きっと誰かが苦勞して買ってくれたランドセルを、わたしはずいぶんと乱暴に扱ってボロボロにしてしまい、小学校の中学年頃からは使わなくなってしまったからです。

少し無理をしながらも、子どもが喜ぶ姿を楽しみに、両親が喜ぶ姿を楽しみに買ってくれたランドセルを、ぞんざいに扱ったことが申し訳なかったという気持ちが、今となってこみ上げてきます。せっかく買ってあげたのに、という気持ちがわいてこなかったでしようか。いやいや、男の子はランドセルをぶん投げるくらいわんぱくな方がよいと、目を細めて眺めてくれていたでしようか。

ランドセルをめぐる小さな思い出に、家族の本質のようなものを感じます。家族とは、誰かの犠牲の上に成り立っています。生まれた子どものために睡眠時間を削って面倒をみる母親、子どもの進級進学や習い事のためにお金を稼ぐ父親、子どもの成長をそと見守る祖父母。多くの人々が自分を犠牲にして家庭を営んでいます。子どもだってそうです。もし両親がいがいみ合っていたとしたら、子どもは自分の身体を両親の間に投げ出すでしょう。「もう、ケンカはやめて」と願いながら。つまり、家族は誰かの犠牲の上に成り立っているものですが、その犠牲が度を超したものとなってしまったら……。もう一緒には暮らせないと思うのも頷けます。

しかし、家族を成り立たせているのは、誰かの人知れぬ犠牲だけではありません。ねぎらいと感謝のことばが、家族をうるおします。言い換えればそれは、祝福のことばです。「よかったね。」「ありがとう。」「おはよう。」「いってまいります。」「ただいま。」「がんばったね。」「いただきます。」「ごちそうさま。」 こういった、なんとはなしのねぎらいのことば、祝福のことばが家族を奮い立たせます。もし、家族の間にことばがなかったら、家族は成り立っていかないでしょう。

「犠牲」と「祝福」、この二つが家族には必要なのだと思います。どんなに家族の形態が変わろうとも、この二つなしには家族は生きていけないように思います。

また、「犠牲」と「祝福」で成り立っているのは実は家族だけではありません。教会がそうです。ミサがそうです。ミサは、キリストが「犠牲」としてパンとぶどう酒の形を通じてささげられます。ささげられたものは聖別され、「キリストの御からだと御血」となります。キリストそのものである「御からだと御血」をいただいて、ミサに参加した人は「祝福」されます。そして「祝福」されたものとして、この世へと再び出て行きます。派遣されていくのです。

ミサとは、キリストがご自分をささげながら、あなたの人生はよいものなのですよ、と祝福してくれている時なのです。

カトリック教会は家庭のことを、伝統的に「家庭教会」と呼んできました。犠牲をささげ、祝福し、賛美するという教会の姿を、個々の家庭の中に見つけようとしたのです。

10の家族があれば、10の問題があります。波風の立たない家族などありません。むしろ家族は、いつも危機のまっただ中にあります。仮に「家族じまい」になったとしても、家族のつながりは保たれるものだと思いたい。聖家族とは、完全無垢なホーリーな家族ではありません。いつも神に頼って生きる、セイントな家族なのだと思います。こんな考えは、実際に家庭を築いたことのない独身の神父の絵空事でしょうか？